

農業を通して考える

人とのつながりと環境

お
お
た

ひろ
た
か

(42歳)

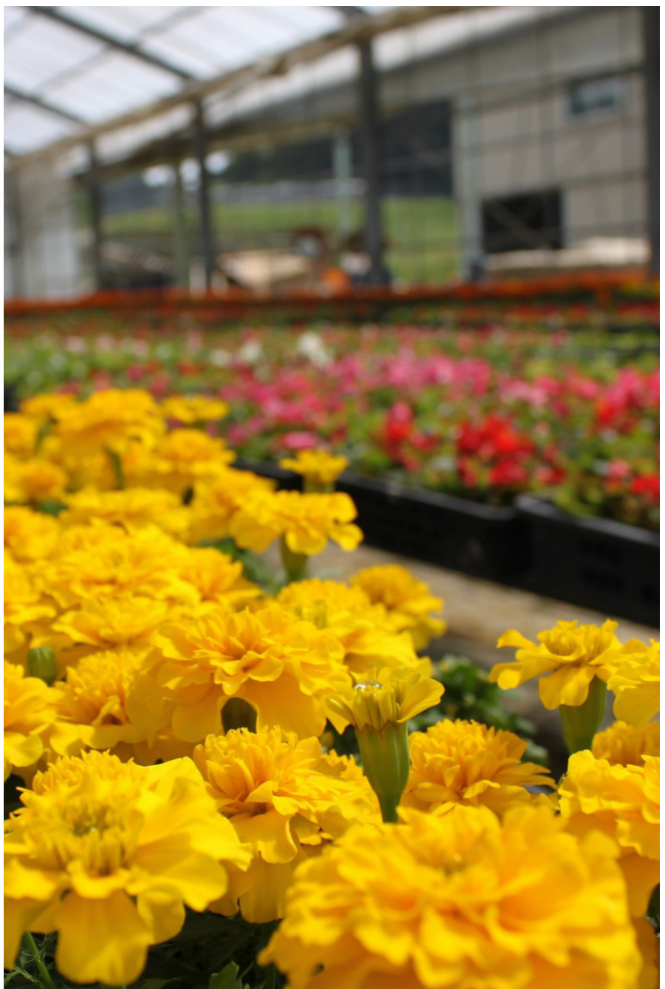
宇陀市大宇陀藤井



父から息子へ。受け継がれる宇陀の花づくり

標高数百メートル、山々に囲まれた宇陀の山里にある宇陀ガーデンの温室の中では、一年を通して色とりどりの花が育てられている。

1969年に宇陀ガーデンを創業したのは、太田さんの父でもある現会長。進行性の目の病を抱えていたことから、全盲になってしまいう前に自分の力でできる仕事を、と始めたのが当時この地ではまだ珍しかったシクラメンやベゴニアなどの鉢花の生産だった。



太田さんが宇陀ガーデンの代表に就任したのは1991年のこと。当時、宇陀地区で大規模な農地造成が行われた時期とも重なり、奈良県農業大学校を卒業後、すぐに家業に就いた。

「ポットのサイズにきれいに納まる大きさ、寿命、花の数など、質の良い花を作るには土と水が命です。宇陀の冷涼な気候と豊かな土壌、そして山から湧き出る水が美しい花を育ててくれます」と太田さん。

もちろん、自然環境だけでは美しい花は育たない。水や肥料の微妙なバランスを調整したり、丁寧な出荷作業を心がけたり、太田さんやスタッフ全員で心を込

めて仕事に当たっている。ベゴニア、インパチエンス、マリーゴールドなど様々な品種を生産しているが、特に、一年を通し丹精込めて育てるシクラメンは全国的にも評価が高く、これまでに奈良県農業賞(2001年)や農林水産大臣賞(2005年)など数々の受賞歴がある。

花も野菜も、少ない農薬で安全なものを目指したい

創業からしばらくは、花の栽培のみを行っていた宇陀ガーデンだが、太田さんが代表就任以降、生産する花の品種、流通先や物流の仕組みなど、時代の流れに合わせて変遷を見させてきた。最近では、農地を広げ、冷涼な高原地の気候を活かして野菜や米の栽培にも力を入れている。

「花にせよ野菜にせよ、できるだけ農薬に頼らず、環境、人、作物のすべてに優



しいものを作りたいと思っています」。

太田さんがそんなふうに考えるようになったのは、日ごろ使用している農薬の健康への影響について、スタッフから質問を受けたのがきっかけだった。

「農薬を営む以上、農薬と縁を切れることはありません。直接口に入る野菜や米はもちろんですが、食べ物ではないにせよ、花についても、農薬のことをもつと真剣に考えるべきだと思っただんです」と太田さんは語る。

以来、スタッフの質問に答えるためにも、農薬について知識を深め、安全性に配慮した農薬だけに頼らない方法を試みている。同時に、化学薬品や除菌剤を開発している会社との出会いをきっかけに、体に有害な物質を含まない上、確実に除菌ができ、さらには抗菌、防カビ効果もあるという除菌剤の開発にも乗り出した。

花がくれた

人とのつながり

花の栽培、野菜や米の生産に加え、除菌剤を販売する会社の代表を務めるなど、日々さまざまな仕事に奔走する太田さん。新たなことに挑戦を重ねていく中でいつも自分の原点として立ち帰るとこ



ろは、やはり花だと言う。

「花の生産で学んだ経験を野菜や米作りに生かしたり、花の病気やスタッフの心配をどうやって解消できるか

考えたことが除菌剤の開発に結びついたり、すべては花を作る仕事から始まりました。野菜作りや除菌剤の仕事もやりがいがあったとしても楽しいですが、やっぱり一番大切にしたいのは、美しい花を育て、届けるということですね」。

除菌剤の販売の仕事では、日本全国は 물론、時には海外へも赴いて新たな可能性を探っている。

「花がくれた新しいやりがいや人との縁を、これからもっと広げていきたいと思っています。夢は、世界中に飲み友達を作ることですね!」

太田さんの

満面の笑顔は期待に満ち、大輪の花のように明るかった。



奈良県を代表する冬の花、シクラメン

赤、紫、白、ピンクなど、品種も多彩な冬の花の代表格で、贈答品としての利用も多いシクラメン。県内で数多く生産されている鉢花類の中でも最も栽培量が多く、年末の出荷のピーク時には栽培農家のハウスが、一面鮮やかなシクラメンの花で埋め尽くされる。高温や強い日差しに弱いいため、宇陀などの冷涼な高地での栽培に適している。

シクラメンは毎年秋の終わりから冬にかけて種をまき、サイズの大きな贈答用のものになると、出荷までおよそ一年もの時間をかけて育てられる。球根植物なので、観賞期間が過ぎても球根を腐らせることなくうまく夏を越せれば、翌年もまた美しい花を楽しむことができる。

